

金

沢を出た翌日は、新潟の柏崎でテント泊をし
た。その次の日は、秋田のバス停で寝た。柏崎
は最初に頼みに行ったお寺で、庭にテントを張るこ
とを了解してもらった。ぼくが持っていたテントは、か
まぼこ形の簡易なもので、顔に落ちる朝露が目が覚め
る代物だった。できれば本堂なり住居なりで寝かせて
もらいたかったのだが、たまたまテント張りの先客が
あったのが運の尽きだった。その連れと勘違いされた
ことがきっかけで、ぼくだけ畳の上で寝るなど言い出
せなくなってしまった。

秋田では、雨中のねぐら探しに難渋した。寺や駅、
交番、ことごとく断られ、半ばやけ気味でトタン張りの
バス停で合羽を着たままヘルメットを枕代わりに横
になった。夜中、顔に懐中電灯の光が当たると横
あつたが、秋田は冷たい、と勝手にふて腐れて目を開
けることもしなかった。小学生くらいの女の子のぼそ
ぼそ話す声が聞こえ、

「やめなさい。」

と叱責する母親らしき女性の声がかぶさつた
が、足音はすぐに小さくなった。

轟音とともに走り去るトラックが何度も眠り
を妨げ、寝る場所の選択を完全に間違えたことを思い
知った。一日寝ないぐらいどうってことないと腹をく

くってしばらくまどろみ、朝まだ暗いうちに出発し
た。

さて、このところ浮かんだ妄想のうち、カブを新た
に購入し齢六十にして再び旅に出ることを吟味して
みた。寺社や無人の施設、停留所などで一夜を過ごすこ
とが今も可能であろうか。

体力をはじめ経験を除く諸能力が十八の時に比べて
著しく劣っていることは仕方ない。それに十八の発す
る「泊めてください」と、六十のじいさんのそれとで
は、受け手の想像の自身がまるで違うだろう。この年
になれば、どう言葉を継ぐかは、よくよく考えておか
ねばなるまい。にしてもだ。体と心のリカバリーに十
分気をつけられればできなくはない気がする。それよりも
社会の側がそんな旅のあり方を許容できるのだろうか
という不安の方が勝る。数打ちやどこか泊めてくれる
だろうという楽観をあこのころのぼくはどこから得て
いたのだろうか。それは、今の若者たちとも共有でき
るものなのだろうか。試しにやってみるのも悪くはない
だろうがあまり明るい見通しは持てそうにない。

寛容な時代は、もう過ぎ去ってしまったのだ。人々
の心は変わらず寛容かもしれないのだが、そうさせま
いとするあの機械、このシステム…。それに抗うこと
は、とても難しい。



専門ババ奮闘記(その2) 62

木幡智恵美

コロナ禍の中で(1)

新型コロナウイルスの感染が広がる中、全国的に学校が休みになり、保育所も自粛と
いう日々が続いた。我が家の男どもも、大好きなパチンコ屋に行く足を何とかとどめて
いたが、学校再開となる五月二十五日の一週間前、ついに夫が禁を破り、家を出た。バ
イクを走らせて帰って来た息子が、「おやじは？」と言うので、「パチンコ」と答える
と、「えっ」という顔。すかさず、「あんた、昨日バイクで走った帰りに行つたんで
しょ」と言うと、「やば。お袋の俺への評価が下がったな」。隠しごとができない息子
は、昨日の帰り際、ぼそと漏らしていたのだ。誘惑に弱い我が家の男ども、あと一週
間が待てないのか。

一足先に自粛を解いて保育所に行き出した寛大と実歩。「何もかも中止なんだよ。寛
大にとつては保育所最後の年なのに、夏祭りもなし、おじいちゃん、おばあちゃんとの
交流会もなし。可哀そうだわ」と娘は言うが、誰もが我慢しているのだから仕方ない。

自粛していた間、寛大と実歩は家でできるいろいろな遊びに挑戦できた。とんとん相
撲、ジェンガ、人生ゲームなど。一番よくやるようになったのがトランプだ。料理の絵
が描かれた二枚ずつあるカードを裏返しにして神経衰弱のようなことをしたところ、寛
大が気に入って何度も繰り返した。これができるならと、トランプのこれから六までの
カードだけで神経衰弱を試してみた。難なくやれる。全部を使ってやるようになり、み
るみるうちにうまくなって、しまいに大人たち誰もが敵わなくなってしまった。実歩
もババ抜きには参加するようになり、そのうち、数字が読めるようになっていった。

「職場は大変なんだって。コロナ患者受け入れるのなんて初めてだからね。みんな、手
探りで、ばたばたらしいわ」育児休暇中で、その騒動に巻き込まれずにいる娘だが、復
帰してからはその渦中であたふたするのだろうか。娘が復帰する頃には落ち着いている
のだろうか。何せ、先が全く見えない現状だ。

私の方も、合気道の稽古は六月末まで中止、手話教室は一年お休み、ライブライリー関
係の行事もすべて中止と、家に籠ることを余儀なくされた。その空白を埋めるかのよう
に、義母にかかわることが増えてきていた。

30代フリーター やあ、ジイさん。中国共産党結党100周年の式典で習近平は「中華民族は国外勢力によるいじめや圧迫を許さない。そのような妄想は14億中国人民の血肉で築いた鋼鉄の長城に必ずぶつかり、頭から血を流すだろう」と中華ナショナリズムむき出しの演説をした。

年金生活者 ナショナリズムの高揚は国家が近代化する過程で避けて通れない経路だ。

近代国家の理念のひとつである「平等」は国家への権力の集中を前提にしている。西欧の封建社会では権力は領主や職業団体、教会などに「不平等」に分散していた。それを国家に集中し、国家だけが権力を持つと宣言したのが絶対王政だ。「平等」をかかげる民主制はそうした国家への権力の集中、つまり国家の絶対性を引き継いで成立した。

そこにまで至っていない中国はいま、絶対王政に相当する段階にあると言える。ナショナリズムは民主制に

国家そのものを信仰の対象に仕立て上げた。それとともに、キリスト教は公的な性格を失い、私的な圏域に追いやられた。

中国はまだその段階にまで達していない。しかし、マルクス・レーニン主義、毛沢東思想という名の国教は、中国社会の資本主義化の進展とともにその力を減退させ、以前のような絶対的な信仰の対象ではなくなりつつある。言い換えれば、他のさまざまな宗教によつて相対化され、公的な性格にほころびを生じさせつつある。

その意味では中国もまたかつて西欧の諸国家がたどった近代化の過程を反復していると言える。ただし、それが完成に向かう見通し、つまり民主制の国家になる見通しはいまだれも立てられないでいる。

30代 中国が宗教ブームを迎えているとしたら、社会が「モノの時代」から「このころの時代」に移行したということか。

年金 日本でもそうした「移行」が顕

よつて高揚する。国民の「平等」、言い換えれば均質性が、ひとつの国家のもとにまとまることを促す。民主化されていない中国でナショナリズムが高揚しているのは、先進諸国がすでに経験したそれを模倣しているからだ。

30代 だが、先進諸国の「自由」は真似ようとするしない。

年金 改革開放で進んだ市場経済の拡大が経済的な「自由」を個人に与え、そのぶん政治的な「不自由」を埋め合わせるから、国民の不満が爆発することはないと踏んでいるわけだ。

ただ、これから先は経済的な「自由」だけではもたないと考えてもいるはずだ。経済の「改革開放」に成功した中国は、成長が鈍化する将来を見越しているように見える。佐藤優が中国の宗教政策について次のような趣旨の指摘をしている。

経済成長が難しくなったとき、次に民衆の心の抛りどころになるものとして習近平は宗教を想定し、キリスト教

著になった時代がある。高度経済成長が終わりを迎えた1970〜80年代の「第3次宗教ブーム」と呼ばれた時代だ。オウム真理教や阿含宗、幸福の科学など新・新宗教と呼ばれる信仰集団が動きを活発化させた。共通する特徴のひとつは入信動機の変化だった。それまで主要な動機だった「貧・病・争」が、「自分探し」や「自己実現」などの心の救済に取って代わられた。

など外国の宗教を体制内部に取り込むと目論んでいる。マルクス・レーニン主義、毛沢東思想という名の宗教が力を低下させている現在、それに代わるさまざまな宗教が国内で勢力を増している。それを無理やり抑えつけるのは不可能なので、共産党に歯向かわないように管理する「宗教の中国化」を進めようとしている（『悪の処世術』と7月9日J B p r e s s インタビューから）。

中国は宗教の限定的な「自由」化を進めようとしていることが佐藤の指摘からわかる。外国の宗教を体制内部に取り込むことは「改革開放」での外国資本の導入に相当する。

30代 それが政治の「自由」化につながるという希望は見えない。

年金 マルクスによれば、西欧の近代国家はキリスト教から解放されることによつて成立した。それまでキリスト教を国教に定めておのれのつつかえ棒にしていたのをやめ、自らの足で立つことで自分自身を宗教化した。つまり

高度経済成長を経て飢えや貧困から解放された国民は、新たな精神の自由を求めるようになった。それまでは飢餓と貧困からの脱出そのものが精神の自由を保障した。その時代が終わり、そうした自由の基盤が失われたばかりか、高度成長によつて築かれ社会は新たなストレスを人びとに強い、精神の自由を拘束するようになった。

そこからの解放への欲求が「第3次宗教ブーム」の背景にある。それは新・新宗教の誕生だけにとどまらなかった。オウム真理教のようにカルト化し、テロを引き起こす集団が生まれた。それをよく承知している今の中国政府が宗教に対して最も警戒していることのひとつが、宗教集団のテロ組織化、武装化だろう。

「宗教の中国化」の名のもとに宗教を共産党の管理下に置くこと、抑圧一本槍ではなく信仰の条件付き「自由」化を進める宗教の「改革開放」は、テロ対策としても避けられない課題となつている。

ニュース日記 794
中村 礼治

中国流の平等と自由